

## 論文の内容の要旨

論文題目 日本浪漫派と「方法」としての岡倉天心  
——保田與重郎、龜井勝一郎、淺野晃を中心に

氏名 李京僖 (イキョンヒ)

本論文の目的は、日本浪漫派を論じる方法として「岡倉天心」に着眼し、日本浪漫派が掲げた「浪漫」と「日本」の關係に焦点を据えながら、昭和における彼らの文芸・批評觀と世界・文明觀とを明らかにすることである。

<研究目的>

日本浪漫派は、昭和10年3月、同人誌『日本浪漫派』の創刊とともに始まった。創刊メンバーは、保田與重郎、龜井勝一郎、神保光太郎、中島榮次郎、中谷孝雄、緒方隆士ら6人であるが、廃刊時(昭和13年8月)の同人数は、50人以上にのぼっている。プロレタリア作家同盟ナルプの解散(1934年2月)など、プロレタリア文学の退潮の前奏が鳴り、転向作家たちによる「転向文学」が相次いで発表され、また「文芸復興」が唱えられる時代となった。そうした中、日本浪漫派は主にコギト派(保田ら)と旧左翼派(龜井ら)との二つの系統を背景にした作家たちによって誕生した。反時代・反俗精神といった浪漫主義を唱えながら誕生した彼らは、徐々に時代の子として昭和10年代に文芸活動の全盛期を迎えていった。

戦後、所謂戦争責任論期を経て、日本浪漫派再論の気運が起こるのは、民族という問題が公共の議論の対象として再び浮かび上がってくる昭和25年頃である。日本浪漫派の執筆活動が再開されるのもこの頃である。当初は日本浪漫派体験を持つ戦中派の党派的論争が際立っていた日本浪漫派論史であるが、それから半世紀が過ぎた今日に至るまでには、注目すべき文章や著書も多く発表されてきた。

ところで、日本浪漫派論には大きく二つの論法が見られる。一つは、日本浪漫派の文学

運動を、日本における特殊な土着的・伝統的美意識及び同人の気質などに還元させるものであり、もう一つは、日本浪漫派のような浪漫主義は特殊なものではないという立場で理論的解明を優先させるものである。前者は、日本の土着的・伝統的美意識に訴える傾向が強く、日本浪漫派に関する総合的観点の提示に欠けるという弱点がある。後者については、それがあつて鋭い見方を提示しえたとしても、はたしてそれで十分に日本浪漫派そのものについて語りえたといえるのかという疑問が残る。こうした二つの論法のいずれにも偏らぬ一貫した観点を保持しつつ、丁寧なテキスト分析に即した、より総合的な日本浪漫派理解が必要だと思われる。

#### <研究方法>

本論文では、そのような二つの論法の間には均衡を取るための装置として、次の幾つかの条件の下でその方法を見出した。まずは、「日本」と「浪漫」という二つの要素を含んでいることである。ここで、「浪漫」的要素の確認については、それが「浪漫」的な要素を持っていることを日本浪漫派側が認めていることに依拠した。二つ目は、日本浪漫派を代表する保田與重郎のみならず、旧プロレタリア文学作家及び転向作家の同人の作品を読む上にも適用できることである。三つ目は、昭和 10 年代に限らず、戦後作品にまで範囲を広げてもなお有効であることである。最後は、土着的情緒概念にも普遍的理論概念にも規定されぬ、具体的な実体を持っていることである。

これらの条件をみたした方法は、日本浪漫派の作品の中から見出された。戦中の日本浪漫派の作品の中には、時代を代表する面を著しく現わしたことで、後に特に問題となったものがある。すなわち、岡倉天心批評である。昭和 10 年代に活発に行われた岡倉天心論は、当時の時局論に引きずられた面が少なくない。それ故、戦後、天心を待っていたのは、まずウルトラ・ナショナリスト、天皇制ファシズムの代弁者、全アジア主義者といったイメージであった。そうしたイメージを創出した戦中の知識人として欠かさず言及されるのが日本浪漫派である。本論文は、そのような日本浪漫派の天心論が、客観的表象の世界を拒み、批評対象に対して批評家の主観を意識的、且つ積極的に働きかける彼らの批評・文芸観を知る上で重要であると考えた。

本論文が岡倉天心に着目するまでの過程において、示唆をうけたいくつかの指摘がある。まずは、日本浪漫派が掲げた天心像から天心を切り離すことの方が、戦時中に広がった天心に対するファシストというイメージを払拭することよりも困難であるとした竹内好の発言（「岡倉天心」『朝日ジャーナル』、1962 年 5 月 27 日）である。昭和初期の彼らによる岡倉天心の発掘に「近代の超克」の意味を読み取った坪内隆彦の見解も重要なものとしてあ

げられる（『岡倉天心の思想探訪』、勁草書房、1998年）。さらに、彼らによる天心像がありのままの天心を写したものではないことに注目し、そこで方法としての天心批評への手掛かりを提示した橋川文三の見解（「〈座談〉混沌の詩精神」（『祖父 岡倉天心』中央公論美術出版、1999年）も特記しておきたいものである。これらの指摘は、日本浪漫派による岡倉天心論への着目を通して、昭和10年代に誕生したこの重要な文学運動の解明が可能であることを提起したと思われる。これらの先行する論考を通じて、本論文の方法として見出されたのが「岡倉天心」である。

日本浪漫派の中で、戦後にいたるまで天心について語り続け、さらにそこから各々の独自の思想を繰り広げたのは保田與重郎、龜井勝一郎、淺野晃である。保田や龜井は先述した二つの系統を各々の出発点とした日本浪漫派の創立メンバーだった点で、また、淺野晃は正式な同人ではなかったものの、同派と思想的に近いところにいた多くの知識人の一人であり、現に同人と見なされる事が多い点で、日本浪漫派理解のためには欠かせない三人である。

#### <各論の概要>

本論文の第1部においては、昭和10年代から盛んに発表された保田、龜井、淺野の岡倉天心批評を取り上げ、各々の天心像を通して日本浪漫派としての文芸・批評観がどのように実践されたかを解明している。

第2部においては、保田、龜井、淺野ら3人のそれまでの作業の集大成といえる作品を取り上げる。それらの作品の中においても天心の行方を追いつつ、彼らの文芸・批評観に通じる世界・文明観の形成及び完成の過程を明らかにし、さらにその意味を昭和という時代の中で検討した。

第1部第1節においては、保田の岡倉天心批評（「明治の精神」（『文芸』昭和12年2月）等）を取り上げる。天心が初めて言及されている「日本の橋」（『文学界』昭和11年10月）の「架け橋」の相を手掛かりとして、保田の日本浪漫派としての文芸・批評観及びその特徴を追究している。第1部第2節においては、龜井の天心批評（「岡倉天心」『作家論』（昭和14年）所収、等）を支えている彼自身の〈再生の詩学〉において、日本浪漫派としての批評・文芸観とその実践的面とを検討した。第1部第3節においては、「東洋の理想と現実」（『新評論』昭和12年12月）等、数多くの天心論を書いた淺野の天心批評を取り上げ、そこに現われている日本浪漫派意識を浮かび上がらせた。そして、彼が、天心の著書における「劍」の精神を自らの、そして昭和の「劍の歌」として特化していく有様とを明らかにした。

第2部第1節においては、保田の『日本の美術史』（昭和43年）を通して、「東西」という相剋する二者の描出や、「美としての日本」の完成について検討し、その際に欠かせない系譜作りの有様などを、著者の天心への意識との関連から解明している。第2部第2節においては、龜井の『大和古寺風物誌』（昭和18年）から『日本人の精神史研究』（昭和41年）に至るまでの作品群、「美術遍歴」及び「古典美鑑賞」に関わる作品群を取り上げた。そこでは相剋する二者の問題をめぐる彼の思想が、「奈良」（東洋）とローマ（西洋）という参照枠から始まり、より本質的な思想軸として新たな二者を確立していく過程を確かめた。なお、彼の場合は、それらの主要作品の周辺を逍遙する天心の姿を通して、彼の第一主題及びその思想的な体系化をより明瞭にした。第2部第3節においては、戦後になって初めて刊行される淺野の全12詩集を取り上げた。作品の中に表現されている「西洋」的なものを明らかにし、さらには「橋」をテーマにした作品群と天心が意識された複数の作品を読みながら、詩人の中に内在する西洋的なものと「日本」の歌における逆説の完成との関連を解明している。

反リアリズム・写実主義の「浪漫」を掲げた保田、龜井、淺野ら日本浪漫派の批評・文芸は、批評対象を通して批評家自身を語るという主観の実践であるという点で共通する。さらにその延長線上で、彼らは相剋する二者の問題への弁証法論的アプローチへの反措定としての文明・世界観を独自の姿で示した。すなわち、「東西」という二者関係を超越した第三者（日本）の想定及びその完成（保田）や、「東洋」と「西洋」という相剋関係から徐々に離れ、「美」と「信仰」とを新たな相剋関係に置いて、二者の「骨肉の争い」を積極的に抱えるものとしての日本思想の体系化（龜井）や、昭和に内在化している西洋的なものの表現とそれを可能にする逆説の精神を完成していった日本の歌（淺野）である。こうしたそれぞれ独自の完成に至った三人の思想的営為であるが、そこには共通の出発点・問題意識があった。すなわち、明治の文明開化期においてはまだ絶対的他者としてあった「西洋」が、己（日本）の中から見出されるに至った昭和、そうした昭和にあって、己の中の「近代」（西洋）をどう扱うべきか、言い換えれば「近代の超克」の対象を、己の中に見つめるところに立っていたことである。

本論文は、分析の方法としての岡倉天心を選択したことで、以上のような日本浪漫派論を昭和の〈近代意識〉の思想化及び完成期として捉える観点を提供することができたと考える。